野に咲く花は、空をみている

～ 言語学者　齋藤秀一の物語 ～

脚本　池田　はじめ

出演者

齋藤　秀一（ひでかつ）
齋藤　美里
齋藤　秀賢
齋藤　徳江（きくよ）
劔持　菊世
山村　俊康
真田　龍蔵（たつぞう）
富樫　小春
土門　多作
日下部　平太
郵便局員
菅原時雄（子ども１）
富樫連（子ども２）
平藤健吉（子ども３）
土屋保（子ども４）
佐藤正子（子ども５）
ドイツの女の子（ハンナ・ベルクマン）
国務大臣
警官・看守
加藤守忠校長
青年団長（阿部和幸　青年団１）
清和淳（青年団２）
難波圭司（青年団３）
田沢満（青年団４）

新田薫（青年団５）
秋山幸子（青年団６）
村人・噂１
村人・噂２
村人・噂３
上沢一郎校長
県教委
鶴岡日報
庄内新報

あらすじ

明治四一年、山形県庄内地方でお寺の長男として生まれた齋藤秀一（ひでかつ）は、東京の大学で学んだ後、地元の小学校で教師として働き始める。

昭和初期、まだ、地方には読み書きのできない人たちがたくさんいた。言語学者でもある秀一は言語をみんなのものとするため、ローマ字やエスペラント語を広めようとするのだが、勤務先の校長の通報で職を失う。さらに封建的な考えが色濃い地域で次第に孤立していく。そんな中、秀一は手話を教えている女性と知り合い結婚。しかし、時代は次第に軍国主義に変貌していき、秀一は言語の面から、誰に誰もが読み書きできる環境をと活動するが、その活動によって治安維持法で違反で特高警察に検挙される。

太平洋戦争の前年に３２歳の若さで亡くなった地方在住の言語学者の知られざる活動を描く実話を基にした家族の物語。

1　今日は 鳥海山がきれいに見える

音楽1

秀一　だから、多作さん、それは、誤解なんです。

多作　何が誤解だ。

秀賢　多作どん、平太は、足の悪い子どもだ。そんな子どもが栗盗めるか？

多作　いや、こいつが栗盗んだ奴らと一緒にいたって、うちの家内がいうもんで。

秀賢　お前さんの家（ち）の隣の勝平は知ってるかい？

多作　ああ、嘉平のとこの息子。

秀賢　あの子と作助の長男は平太にかばん持ちをさせてる。

多作　足の悪い平太に？それは知らなんだ。

秀賢　それを見て、わしは何回も注意した。しかし、あいつらは聞かん。平太の家が嘉平の小作だからだ。面倒みてやってるのは、俺らだけとぬかしおった。

多作　なんと。

秀賢　もしかして、平太もやったのかも知れん。だが、考えてみてくれ、多作どん。平太に栗を盗める道理はあるか。痛い足を引きずってまで。

多作　・・・ない。
秀賢　大方、平太は利用されたんだろうさ。だが、本当のところはわからない。
多作　ああ、わかった、和尚様。じゃ、まず隣の親父に聞いてみるさ。
秀賢　おお、よろしく頼む。
秀一　平太、多作さん、おまえが盗んでないこと、わかってくれたみたいだよ。
平太　ありがと。
秀賢　秀一、今日お前はとても良いことをした。平太を平太としてみていた。
秀一　えっ。
秀賢　どんな状況であろうと自分が正しいと信じることを誠意を持って為すべし。忘れるな。
秀一　はい。

小春　私の夫、齋藤秀一は、一九〇八年、明治四一年、山形県東田川郡山添村、現在の鶴岡市東荒屋の泉流寺というお寺の長男として生まれました。当時日本は、日露戦争の膨大な戦費のツケと世界恐慌によって経済は疲弊し、また、重なる冷害による凶作も相まって多くの国民が貧困に喘いでいました。お寺とはいえ、泉流寺も例外ではありません。暮らしは決して楽ではありませんでした。
夫には四つ違いの妹がいて、名を美里といいます。近所の人が人形みたいだと噂するほど、かわいい女の子でした。脊椎カリエスを病んで体の弱かった美里さんは、あまり学校へも通えませんでしたが、夫が文字の読み書きを教えるとみるみる上達し、やがて本を読むのが大好きな少女に成長しました。

音楽1終了

菊世　じゃ、徳江さん、ありがとう、教えてもらって！
徳江　菊世さん、店に種の値段、間違ってたといってね。
菊世　わかった、わかった、ありがとう。
秀一　どうした、ヨスケのおばちゃん。
徳江　請求書、間違ってたみたいで・・。値段、去年の倍だったって。
秀一　ああ、おばちゃん、字が読めないもんな。
徳江　ひどい、種屋もいるもんだ。こら、美里、そんなに根詰めて本を読まない！
秀一　俺がまた母さんに叱られる。
美里　面白いだもん、アンデルセン。お兄ちゃんこそ、ローマ字の懸賞文ばかり書いてないで、受験勉強したら。
秀一　してるよ。今、息抜きしてるの。
美里　お兄ちゃんは文字のマニアだもんね。
秀一　まあ、そうだな。それにしてもマニアなんて言葉よく知ってるな。
美里　うん。見て、見て、今日は鳥海山がきれい。
秀一　おまえな、あんまり騒ぐな。まだ熱が上がるぞ。
美里　今日は、具合がいいの。
山村　ごめんくださーい。

徳江　あら。秀一、山村くん来たよー。
秀一　おう。あがれ、あがれ。
徳江　あがって、お茶飲んでいってください。
山村　いや、俺は米の精米に来て・・。今、自転車に積んであるんだ。遅くなると夕飯を抜かれる。
徳江
美里　アハハハ。
秀一　それを早くいえ。

小春　同級生の山村俊康さんは、隣村の寺の次男で、秀一さんと同じく東京の大学を目指す成績優秀な学生でした。寺は長男が継ぐことになっているので、秀一さんよりも自由で気楽な立場でした。

山村　お袋から、山添にいくんだったら、泉流寺さんに干し柿を持っていけって言われて。
徳江　あらーっ、どうもありがとう。毎年美味しい干し柿をもらって。
美里　お使いより受験勉強でしょ、山村くん。
秀一　山村くんだぁ？　こら、美里。
山村　いや、気分転換も大事だろ。
徳江　そう。美里も本ばかり読んでないで・・。
山村　いいんじゃないですか、本が好きなのは。
徳江　山村くん、どこ受けんの？
山村　あっ、駒澤大学です。

徳江　あらっ、そう・・・・。
山村　じゃ、おれ帰る。
徳江　ありがとう。あ、何か・・・・・・。
山村　あーっ、気使わないでと母ちゃんからいわれてる。じゃ、　秀一、さいなら。
秀一　んー、気をつけてな。

小春　重たい米にハンドルを取られながら、山村くんは帰っていきました。

徳江　いい人。秀一、明日何かお返ししないとね。
秀一　大丈夫。いつもノート貸してるから。
徳江　そんなことじゃなくて。
美里　私の分ある？
徳江　あるけど、まずお父さんに出してから。
美里　嫌だ、いま食べたいー。
秀一　こら、美里。　お父さん、まだ帰らない？
徳江　ジンタロさん家（ち）の葬式、午後からだったから。
秀一　じっちゃんな・・・・・・。
徳江　もう晩方だし、もうすぐだと思うけど。
秀一　じゃ、もう玄関で待ってないと。
徳江　美里はお迎えできる？

秀一　無理するな。

美里　ううん、今日は大丈夫。

小春　お寺の住職である秀賢さんは二十歳で徴兵され、日露戦争に従軍しました。いつも、きちんと正座し、家族でさえ胡坐をかいているところを見たことがありません。酒も飲みましたが、決してふるまいを乱すようなことはない人でした。また、曲がったことが嫌いな正義感の強い人でもありました。己を律することに厳しかった秀賢さんは、他人にもいい加減な生き方は許そうとしない人で、葬式に出掛けて帰宅するときは家族全員が玄関に迎え、両手をついて「おかえりなさい」とあいさつしないと叱られました。畳の上の本や新聞をまたぐことさえ許さなったほどです。

秀賢　ただいま。

家族三人　おかえりなさいませ！

小春　大学受験をひかえたある日、秀賢さんは秀一さんを部屋に呼びました。

秀賢　秀一、志望校は決まったのか？

秀一　早稲田か、國學院に行きたいと考えています。

秀賢　檀家がなんというか。

秀一　……。

秀賢　秀一、駒澤に行ってくれないか。うちは檀家が百二十軒あるといっても、金がたくさんあるわけじゃない

小春　秀一さんは黙って下を向いていました。「父の言うことはもっともだ。駒澤大学には寺院の子弟に経済的な便宜を図る特別措置もある。お寺を継ぐための進学であれば、檀家衆にも面目が立つ。檀家衆の理解を得なければ大学には行けない」と秀一さんは考えたのでしょう。

秀一　……わかりました。

小春　大正十五年、秀一さんは、駒澤大学予科一学年に入学しました。この年、山添村から東京の大学に進学した者は、秀一さん一人でした。秀一さんは、友人の山村さんと一緒に大学の寄宿舎に入りました。

音楽2入る

2　文学の病、膏肓に入る

音楽2終了

山村　おう、お帰り。やっぱり漱石は面白いな。

秀一　なにしてんだ。勝手に人の本を読むな。

山村　そう堅いことを言うな。しかし、もったいないじゃないか？　本、売るんだって？俺は売らないな。

秀一　僕は売る。少なくてもまた買える本なら。

山村　小説だったら、俺だってそうするさ。

秀一　金を出しても手に入らない貴重な小説だってあるじゃないか。小説といえばすぐ軟弱な文学と決めつけるのはどうかな。

山村　小説なんて所詮、娯楽さ。

秀一　じゃあ、蟹工船はどうなのさ。

山村　小林多喜二の？

秀一　あれは今年の日本文学の一つの収穫だろう。蟹工船を取り上げて、実は植民地の搾取を暴いている。新聞の批評では『非人間的な搾取を受けている労働者が社会の全ての経済的、国際的矛盾の割れ目から、不可避的な力をもって盛り上がってくる姿を、これほどまでにはっきりと客観的に描き出した作品はこれまで存在しなかった』と書いてあった。

山村　俺もその通りだと思った。

秀一　だろう、「小説なんて所詮娯楽さ」じゃないじゃないか。

山村　まいった。おまえの方が理屈が立ってる。「文学の病、膏盲に入る（こうこうにいる）」だな

秀一　あれ、それって「こうもうにいる」じゃないの？

山村　違うだろ、「こうこう」だよ。

秀一　いや、それは違うと思うよ。
山村　それなら、辞書で調べてみようじゃないか。賭けるか？
秀一　何を？
山村　木村屋のあんパン！
秀一　よし！　辞書を見せろよ。
山村　ええと・・・ほら、「こうこう」と書いてある！
秀一　まてまて、ほら最後に「慣用では『こうもう』とも読む」と書いてある！
山村　本当だ。くっそうー。
２人　（笑い合う）

小春　二人は、お互いお金を出し合って木村屋のあんパンを一緒に食べました。東京での生生活は結局六年続き、秀一さんはその間、言葉の勉強に打ち込むことになります
秀一　勉強して死んだら、人は笑うかもしれないが、しかし僕は本望だ。

３　現代は文字が少数者の独占物ではなくなった

秀一　封建時代、知識は少数の支配者に独占されていた。庶民が読み書きを覚えると賢くなって支配者に逆らうようになる。それを恐れたから、彼らは難しい漢字のままにしていたんだ。しかし、今は文字が少数者の独占物ではなくなった。新しい国字論が起こってもいい時じゃないだろうか。ローマ字は文字の数が少ないし、誰でも簡単に読める。小学

校で教えれば子供たちはあっという間に使いこなすだろう。沢山の漢字を覚える時間がいらなくなるからその分、もっともっと、いろんなことを学べるようになるはずだ。僕はローマ字を勉強してきた。でもそれだけじゃなくて、英語やドイツ語、ラテン語、中国語、世界の全ての言語を身につけたい。

山村　「ザメンホフの生涯」は読んだか？

秀一　ザメンホフ？

山村　エスペラント語を創った人さ。

秀一　エスペラント語？

音楽３「歓喜の歌」入る。

小春　それは、世界共通語としてのエスペラント語誕生の物語でした。エスペラント語とは、ポーランド人の眼科医ザメンホフが考案した国際共通語のことです。彼の故郷はポーランド、ドイツ、ユダヤそしてロシアの四つの民族が雑居する地域でした。そのため、言語の多様性から相互理解がうまくいかず、四つの民族が反目しあっている現実がありました。ザメントフはそれを見て育ち、いつも心を痛めていました。その解決策として、異なる民族が対等の立場で話し合える共通言語としてエスペラント語は考案されたのです。国際共通語としてのエスペラント語は、文法が十六あるだけの理解しやすい言語でした。そのため、一九世紀末から二十世紀初頭にかけて非常な勢いで普及していきまし

た。日本でも、二十世紀初頭に吉野作造らが学び始め、秀一さんが目にする頃には学会も創立され、普及が進み活気に溢れていました　昭和二年、秀一さんは初めてエスペラント語に出会ったのです。

秀一　エスペラント語、エスペラント語。すごい、すごいぞ。画期的だ！

4　トンネルだ　果てしない暗闇を　突き進む

音楽3終わる。

郵便局員　齋藤秀一さんに、電報です。

秀一　……う、嘘だ。

音楽4が入る。

徳江　秀一、美里が死んでしまったよお。

秀賢　明後日（あさって）、葬式だ。汽車賃送るから、すぐ帰れ。

秀一　なぜだ、なぜだ、美里！

山村　金が届くの待っていたら間に合わないぞ。これですぐ汽車に乗れ、秀一。

秀一　学校にも行けず、友達もできず、美里はどんなにさみしかったか。ああ、もっともっと、たくさんの本を読ませてあげたかったのに。

山村　秀一！

汽笛の音

秀一　上野駅は混雑し、汽車は満員で、ずっと立ち通しのまま翌朝鶴岡に着いた。庄内は、まだ一面の銀世界だった。夜が明けきらぬ暗い雪道を踏みしめながら僕は歩いた。実家では、親父やお袋をはじめ、親戚のおじちゃん、おばちゃんが大勢で今か今かと僕の帰りを待っていた。

秀一　美里、苦しかったろうな。痛かったか？

徳江　前の日は、ちょっと苦しそうで・・・・。

秀一　・・・・。

徳江　お前に会いたいって。

秀一　・・・・・。

徳江　これ。

秀一　手紙？

美里　お兄ちゃん、年下の私が早くに逝ってしまうこと、許してください。お兄ちゃんに字を教えてもらって、私は本が大好きになりました。家の外には

あまり出られなかったけど、本を通して私は世界に触れることができました。お兄ちゃんは知ってる？　冬の天気のいい日に見る鳥海山や月山は信じられないくらい美しいこと。私は家の中からそれを見られただけでも幸せだったと思っています。家の中にだって宇宙があるのよ。

お母さんのおいしい料理をいただくこと。お秀一ちゃんの美しい話を聞くこと。私は大好きでした。

お兄ちゃん、お兄ちゃんは自分の道を真っ直ぐに歩いて行ってね。こちらに来るのはそれからでいいからね。ゆっくり来てね、ゆっくりね。

音楽4が終わる。音楽5「インターナショナル」の歌

5　起て、飢えたる者よ

音楽5終わり

小春　昭和二年五月一日、東京の日比谷公園では、全国から労働者や、農民組合員が一万人以上集まりメーデーが開催されていました。

山村　龍蔵、やっぱりお前も来てたか。山形からか？

真田　そうだ。吸うか？

山村　おまえ、モク吸ってたか？

真田　（タバコを深く吸う）　赤紙が来たから、これが最初で最後のメーデーだ。
山村　赤紙!?
真田　満州の軍隊だそうだ。
山村　そうか・・・・。
真田　だから、俺は組合から抜ける。
山村　軍隊って三年くらいだろ、また、戻ればいい。
真田　親父が事故に遭って、稼げない。
山村　えっ！あんな丈夫な人が。
真田　今はお袋が頑張ってるけどな。
山村　そうかあ。
真田　だから、俺は満州から帰ったら、百姓する。
山村　もったいねえな。・・・わかった。元気でな。
真田　お前も精々頑張れや。坊主になるのか、駒澤だったら。
山村　いいや、俺はしばらく学生だ。寺の跡継ぎは兄貴がいるし、教師にでもなろうかと考えてる。
真田　そうか・・・・教師か。

6　泣きわめく子を背負うた生徒　今日も3人揺すぶりながら　書く字は曲る

小春　昭和六年三月、秀一さんは駒澤大学を卒業して、四月から東田川郡大泉村にある「大泉尋常高等小学校大平分教場」の教壇に立つことになりました。赴任初日、秀一さんを待っていたのは一年から三年生まで男女合わせて十七人の生徒たちでした。

菅原時雄　今度くる先生は東京の大学を出たそうだ。

富樫連　うん。頭のいい先生なんだって。

土屋保　そう、らしい。

平藤健吉　東京では、みんな革靴履いてるらしいぞ。

菅原時雄　あっ、起立！　礼！

生徒達　おはようございます！

秀一　お、お早うございます・・・・・。これから仲良く元気で勉強していこう。

生徒達　はーい！

菅原時雄　着席！

秀一　ふう。

小春　この年は酷い冷夏で米の収穫量がとても少なく、とくに東北地方は大凶作となりました。さらに世界恐慌のあおりを受けて、日本の輸出を支えていた絹産業が大打撃を受け、日本中の農村はどこも困窮を極めていました。

秀一　正子どうした？　朝からずっと元気がないな。

正子　・・・・。

秀一　ん、風邪引いたか？　腹いたいか？

富樫連　ちがうよ、先生。

正子　いうな！
秀一　何んだい？　なんでもいってごらん。
正子　（黙ってイヤイヤをする）
富樫連　正子のお姉ちゃん売られたんだ。
正子　ゆうな、馬鹿！
秀一　・・・・。
正子　ああアあーっ!!（教室の天井が抜けるほどの声で泣き出す）
秀一　・・・・泣くな・・・・泣くな。

音楽６　不安げな音楽が静かに

秀一　くそ、人身売買。金で人を買うだと。それが、人間のやることか。人間らしい生活をしているのは地主だけではないか。小作農民たちは皆、畳も敷けず薄っぺらな藁むしろの上で暮らしている。不平等ではないか。
小春　秀一さんは、ドイツで発行されていたエスペラント語の新聞「ヘロルド」を購読していました。国内のどの新聞よりも「ヘロルド」を信頼し、配達されてくる日を心待ちにしていたのです。この時期、日本が軍国主義に傾倒し、変貌していく姿を外国からの眼で見ることができた数少ない日本人でした。
「ヘロルド」にはこんな投稿が掲載されていました。ドイツの少女がエスペラント語でしたためたものです。

少女　Mi estas knabino log^anta en berlino.（ミィ エスタス クナビーノ ロジャンタ エン ベルリーノ）

秀一　わたしはベルリンに住む女の子です。

少女　En Germanujo, Nazia Germanio kun Hitler kiu gvidanto（エン ゲルマヌーヨ ナズィア ゲルマニーオ クン ヒトラー キウ グビターント）

秀一　ドイツではヒットラーが党首を務めるナチスドイツが、

少女　Akirante entuziasman subtenon.（アキランテ エンツジアースマン スブテーノン）

秀一　熱狂的な支持を得つつあります。

少女　Pro la pezaj riparoi kaj la Granda Depresio truditaj en la unua mondmilito（プロ ラ ペーザイ リパーロイ カイ ラ グランダ デプレシーオ トゥディタイ エン ラ ウヌア モンディリート）

秀一　第一次世界大戦で課された重い賠償と世界恐慌によって、

少女　La ekonomio de Germanio fundigas（ラ エコノミーオ デ ゲルマニーオ フディーナス）

秀一　ドイツの経済はどん底です。

少女　La urbo estas plena de senlaboruloj（ラ ウーボ エスタス プレナ デ センラボルロイ）

秀一　街には失業者が溢れ、

少女　Cirkauita de malglata etoso（チカウィタ デ マグラータ エトーソ）

秀一　荒れた雰囲気に包まれています。

少女　Tiu freneza entuziasmo（ティウ フレネーザ エントゥジアースモ）

秀一　その中での狂ったような熱狂。

少女　Mi tre tre timas（ミ トゥレ トゥレ ティマース）

秀一　私はとてもとても怖いです。Ankau mi timas（アンカウ　ミ　ティマース）（わたしもとても怖い）

音楽6が激しく大きくなって、終了

7　二十ページを開きなさい　人殺しを忠義と教える心は暗い

国務大臣　我が国に於きまして、無政府主義者、共産主義者其他の者の運動が近年著しく発展を見るに至りまして、過激なる運動を計画実行せんとする者があります。然（しか）るにこれらの行動に対する取締規定が不十分にして、しばしば危険なる行動を全く取り締まり得ざる場合があり、本法案を立案した次第であります。万世一系の皇室を奉載して居る、帝国の此国体を変革しようとするような、現の過激なる社会的運動中に存する、最も重大なる危険と弊害とを少なからしむると同時に、一般社会を戒め不穏なる行動に出づるが如き事を予防せんとするのが本件「治安維持法案」の趣旨であるのであります。願わくは慎重にご審議の上、本案にご協賛を与へられんことを切に希望致します。

拍手

小春　「治安維持法」は社会主義運動や労働運動はもちろん、思想・学問・言論・芸術表現、さらには読書会、レコード鑑賞など、あらゆる自由への過酷な弾圧の法的根拠となり、

後に死刑をも適用されます。そして、その中核を担い、疑わしいと思われる人物を片っ端から探し出し検挙したのが「特別高等警察」、特高でした。

加藤校長　では、みんな準備はいいか。山村先生お願いします。

山村　じゃ、みんな、いちたすいちはあ、にいぃー。

警官　山村俊康（としやす）。

山村　は？

警官　治安維持法違反の疑いが生じている。警察署に同行願おう。

山村　俺は何もやってない。

警官　ローマ字を子どもたちに教えているだろう。

山村　それは、文部省の指導要綱にもあることでしょう。

警官　とにかく、山村先生はアカだという通報があった。

加藤校長　待ってくださいよ。今、卒業写真を撮るところですよ。子どもたちが見ている前でやることじゃないでしょう。

警官　子どものことなど、かまっていられるか。

加藤校長　何を言うか。一生に一回しかない子どもたちの卒業式を滅茶苦茶にしおって。

警官　邪魔するものは公務執行妨害で逮捕する。文句があれば、山形警察署にこい！

小春　警官は山村さんを山形警察署に連行しました。取調室に入ると特高の係員が待っていました。

山村　龍蔵!?

真田　日比谷のメーデー以来だな。

山村　おまえ、警官になってたのか 。

真田　貴様と違って食わせなきゃならん家族がいるんでな。色々と忙しいんだ。

山村　凄腕の特高が山形にいるというのは、お前か。

真田　お褒めにあずかり恐縮だ。

山村　そうか、おまえか。おまえが後ろで糸を引いてたんだな！

真田　他人(ひと)聞きの悪い事いわないで欲しいな。俺は職務に忠実なだけだ。

山村　昔の仲間を売ってか！

真田　いい加減にしろ、山村。

山村　・・・・・。

真田　だんまりか。やめた方がいいぞ。結局喋るんだ。皆んな、な。

小春　一九三二年、昭和七年、日本政府は清朝の皇帝だった溥儀を担ぎ上げ、満州国を建国。翌年、日本は世界の多くの国が抗議する中、国際連盟を脱退しました。山形県内でも、教育労働者の組合設立に尽力した幹部たちが一斉に検挙され、新聞は「教員赤化(せっか)事件」として大々的に報道しました。

音楽7入る

8　大道にある地下鉄工事の深い穴 外の賑やかさうちの暗さ 私そっくりではないか

音楽7終わる

青年団長　皆さん、今日は参加いただきありがとうございます。これから大鳥青年団「ローマ字研修会」を開催します。（拍手がおこる）

今回の講師は、大泉小学校大平分教場の準訓導で言語学者として全国的にも有名な齋藤秀一先生です。先生は鶴岡日報にも時々論文を発表なさっておられる方なので知っている人も多いと思いますが、つけ加えると、先生は東京の大学を卒業しているとっても偉い方です。では、先生よろしくお願いいたします。

秀一　はい。ご紹介いただいた齋藤です。でも、そんなに有名でもないし偉くもありません。（笑いが起こる）去年から大泉小学校大平分教場で教えている新米の教師です。みなさんよろしくお願いいたします。

参加者たち　（拍手）

清和淳　ごしゃがねぐて、先生でないみたいだーって評判だ！

難波圭司　んだんだ。

参加者たち（笑い）

秀一　ありがとうございます。それは、かちょぺねってことでしょうか？

田沢満　先生、それは、何語だもんだ？

秀一　エスペラント語。ではなく庄内弁ですの。さて、みんなに教科書は行き渡りましたか。では、これからローマ字の講習をはじめます。あ、ローマ字の前に少しエスペラント語の話をしますね。エスペラント語は十六の文法で構成されていて、日本語よりもとても

簡単におぼえられます。例えば、干し柿はエスペラント語では「sekigita persimono（セキギタ ペルスィモーノ）」と言います。

参加者たち　へーぇ。（笑う）

小春　青年団主催のローマ字研修会は和やかに過ぎました。

新田薫　齋藤先生、今日はありがど。これから私たち女子青年団が慰労会をやるから参加して。

秋山幸子　夜は、青年団弁論大会もあるから、ぜひ聞いていって。

秀一　はい。

噂　1　こんな山の中に、東京の大学を卒業した若い者が何の理由もなく来るわけがない。

2　学校の子どもたちにも、村の若い衆にもローマ字を教えて、何を企んでる。

3　外国から横文字の雑誌が毎日のように送られくんだと。

1　多分、ただの教師ではないだろう。

2　じゃ、何？

三人　（口だけ動いている）アカ。アカ？　アカてなんのこと？　アカって・・・。

上沢校長　なんだ、これは。

秀一　本です。

上沢　こんな横文字の本読んで、いいと思っているのか！

秀一　待ってください、校長。これは、分教場においてある僕の私物ですよ。

上沢　私物のことを話しているんじゃない！お前の思想がいけないんだ。こんな横文字を使っているなんざ、アカ以外の何ものでもない！　俺は警察に代わってガサやってきたんだ。

秀一　警察は令状をもって家宅捜索しますよ。

上沢　がたがた言うな！　わしのゆうことを聞かないなら、辞めさせるぞ。

秀一　……。

上沢　誓約書をかけ。

秀一　なんのですか？

上沢　わしの言うことに従うという誓約書だ。とにかく書け。

小春　昭和七年九月、秀一さんは、塚田先生らと共に鶴岡警察署に検挙されました。

上沢　やっぱり齋藤先生はアカだったようだ。

県教委　三人とも代用教員ですが、解雇しました。赤化の程度ははっきりしませんが、とにかく教育者としては不適格。辞めてもらったわけです。

プロジェクターで文字が浮かぶ。「東田川郡大泉分教場から／アカ化教員三名検挙／ローマ字研究を名に文化闘争の／左傾サークルを結成」荘内新報

鶴岡日報　過般、検挙された東田川郡山添村東荒屋の齋藤秀一は県特高課員が厳しく調べていたが、二週間の及ぶ取り調べが一段落し、書類送検となったため、同人の実父泉流寺住職

齋藤秀賢を呼び出し、吉村鶴岡署長が秀一を訓戒し、身柄を実父に保証せしめ釈放とした。

庄内新報　吉村鶴岡警察署長は極秘につき語らざるも、大泉村にはローマ字研究会なるものがありて、会員五〇人余を有し、齋藤は同研究会により「ローマ字きかんしゃ」なるガリ版の雑誌を発行しているもので、今回の事件の内容はほとんど問題にならぬものらしく、単に齋藤、塚田らは文化運動の研究に耽溺しつつあるに過ぎず、具体的闘争の形跡はさらに認めないというので大山鳴動の感があるものと見られている。

小春　こうして二日後、秀一さんは釈放されました。しかし、「検挙されたこと自体、教育上問題である」と、教職に復帰することはできなかったのです。

村人一　大きな声ではいえないけど、泉流寺の息子、また捕まった。

村人二　そう、そう、アカなんだと。

村人三　アカッ？キョーサントーじゃなくて？

村人一　悪いことをして、学校辞めさせられたんだと。

村人二　東京の大学に、行かせたのが悪かったんだな。

村人達　そうだ、そうだ。

村人達　そうだ、そうだ。

小春　職を失った秀一さんは、鶴岡市に出る日以外はもっぱら読書と執筆に明け暮れていました。この時期は色々な土地の方言に関する論文を書きまくって、書いた論文は東京の言語関係の雑誌社に送り、「採用し掲載する」という通知をあちこちから受け取っていま

した。しかし、いい年をして親から食べさせてもらっていることが秀一さんには心苦しくてなりません。職探しに努めてはいましたが、アカのレッテルを貼られた秀一さんに、おいそれと仕事先は見つかりませんでした。

また、身辺にはいつも特高の監視の目が光っていました。プロレタリア作家同盟の鶴岡地区委員会に何度か足を運んでいた秀一は、その年の十一月、再び検挙されます。

秀賢　寺のものとして、村の人たちから信用が無いようでは困るのだ。秀一、なぜこんな簡単なことがわからない。何しに大学にいったんだ。

秀一　酒盃（さかずき）持つ手ふるわせて、父は今夜もわたしを叱る。寺を去れと言われれば、いつでも去るだけの覚悟は持ち合わせている。

だが、正義を貫けといったかつての父はどこにいった。

こうなったもっとも大きな原因は何かといえば、困窮しているみんなの開放のために力を尽くそうと志したためではないか。僕の誠意が父や母、そして親戚や村の連中にもわかってもらえる日が必ずくる。そのことを疑うな。それは、ただ時間の問題だ。

己の正しいと思うことを、おおっぴらに述べ立て活動することができないのみか、あらゆる妨げをもって道を阻まれ、それを乗り切れないことほど腹の立つものは、けだし稀であろう。

夜になると、気持ちがむしゃくしゃしてたまらない。過去も暗い、将来も少なくとも近くは暗い。いったい僕はどうすればいいのだろう。

菊世　なあ、和尚様、秀ちゃんには、絶対嫁が必要だと思うよ。嫁を娶れば落ち着くと思う。

秀賢　といっても、全然もらう気はないな。母さん、だれが、付き合って人いるか？
徳江　いない、いない。
菊世　じゃ、私が紹介する！
秀一　必要ない！俺は結婚しない！
徳江　秀一！
秀賢　ごめんな、菊世さん、あの通り。
菊世　いい人、いるんだけどな。
村人達　そうだ、そうだ。

音楽８入る

９　何ゆえ 我と同じ趣味を持つ人はないかと 思うときなり

音楽８終わる

山村　そうか。それは大変だったな。
秀一　特高は、相変わらず嗅ぎ回っているし。
山村　うん。取り調べはひどかったな。太ももが折れるかと思った。おまえ、体は大丈夫か？
秀一　・・・なんとか。
山村　山形の特高に真田という男がいる。気をつけろ、昔、農民組合に関わってた奴だ。

秀一　なぜ、特高なんかに。
山村　・・・ま、色々あるんだろうさ。それより、これからどうするんだ？
秀一　職があればと思うが、この不況ではな。
山村　俺のところに空きがあれば、すぐ知らせるよ。
秀一　東北帝大か!?
山村　特高のことなんか歯牙にもかけず、いい人材なら採用している。俺も、そこの教授の引きで助教の仕事をしているんだ。お前だって、方言とかローマ字とかでは実績を挙げてるじゃないか
秀一　まだまだ。雑誌へ論文を投稿しているくらいじゃ。
山村　だったら、それを送ってくれ。今度、教授に見せておくから。
秀一　頼む、ぜひ頼む。
山村　おう。　ところで、全然関係ないけど、
秀一　何？
山村　おまえ、彼女いるか？
秀一　いるわけないだろ！
山村　俺の姉貴の嫁入り先に旦那の妹がいるんだ。名前は小春、歳はお前より三つ下かな、二十三だ。鶴岡の町医者に助産婦として勤めている。医療関係の本を読むためにドイツ語も勉強しているらしくて、姉貴の旦那は困っている。
秀一　どうして？

山村　女で、稼ぎがあって勉強好きで、おまけに手話も教えている。敷居が高くないか？　嫁に出そうにも相手がいない。

秀一　俺はいいと思うけどなあ。男尊女卑なんて間違ってるよ。

山村　そう。だから俺は、おまえならいいと思って、姉貴に話してみた。そしたら本人からも、一度手話の教室を見に来てくれと言われたそうだ

秀一　え、ええっ。

山村　頼む。姉貴の旦那にも頼まれているんだ。俺の顔を立てると思って足を運んでくれ。見合いよりずっといいだろ。

秀一　見合いだろうが。

小春が指揮し、音楽９「花」を手話付きで合唱

秀一　齋藤秀一です。初めまして。山村君から、その・・・。

小春　初めまして、富樫小春でございます。わざわざ足をお運びいただき感謝いたします。

秀一　いえ。手話ですか。興味深いですね。

小春　男の方で、こんなに熱心に聞いてくれる方は珍しいです。

秀一　そうですか。

小春　手話はまだ歴史が浅いのですけれど、でも、耳の聞こえない人が会話する方法として画期的なことなんですよ。

秀一　言葉の一つですね。

小春　生活するために、ことばは必要なんです。秀一さんが教えられているローマ字も、同じじゃないですか。

秀一　いやいや、手話の方が切実ですよ、生活のためには。僕には耳の聞こえない人の言葉という発想がなかった。

小春　私、山形県教育も読ませていただきました。

秀一　なんか恐縮です。あれ、何か、いい匂い。

小春　ああ、あれね。庭の木蓮の匂いです。

穏やかな音楽10 入る

小春　私と秀一さんが結婚したのは、昭和九年十一月十四日のことでした。

私の父、富樫光玉（とがしこうぎょく）は黒川小学校の教諭であるばかりでなく、森高院というお寺の住職でもありました。同じ曹洞宗ということもあり、仕事上の付き合いも以前からありましたから、縁談はトントン拍子にまとまったのです。

10　暗闇を突き進む　止まらない汽車を想像する

小春　昭和九年、一九三四年は、九州・四国は干ばつ、北陸・山陰は冷害と大雪、関西と九州は台風による風水害、東北は冷害、と日本各地が自然災害に見舞われた年でした。政府は、この状況を打開するため満州国を建国。大陸進出を推し進めていきました。

そんな中、秀一さんは以前からの念願であった、雑誌「文字と言語」を発行しました。五十ページ程と薄いものでしたが、日本を代表する識者が参加し、全国的にもレベルの高いものとなっていました。また、上海世界語者協会機関紙「ラ・モヴァード」には、「日本のローマ字運動史」という論文をエスペラント語で発表し、さらに昭和十二年には、全文エスペラント語の雑誌「ラティーニーゴ」を創刊しました。私は、秀一さんの作る雑誌の一番最初の読者になっていました。

音楽10 終了

小春　あんまり根を詰めたら、体がもちませんよ。はい、お茶と干柿。

秀一　ふーっ。おお、sekigita persimono か。

小春　葉さんにいただいた本ですか？

秀一　うん、「拉丁化概論」。

小春　どれどれ。「雑誌やビラで大衆に訴えてみたところで、全国民の八〇パーセントが明き盲の中国では、容易に反響が起こらない。魯迅氏はかつて『中国には文字が全くないに等しい』という名言を残しているが、八〇パーセントの大衆のために書かれた文章が、僅か二〇パーセントの知識人にしか理解されないという大きな矛盾が生まれている。そこでは、大衆に文字を知らせることが国防運動の第一の任務となる」

秀一　つまり、四億三千万人のうち八〇パーセントの中国人は字が読めない。文盲を無くさなければ民族の解放は実現できない、と葉さんは言っているんだ。

小春　日頃、あなたがいってることと一緒。
秀一　だから一日も早く日本語に訳して出版したいんだよ。
小春　でも、体を壊しては。
秀一　きみの方こそ大丈夫なの？　調子悪そうだよ。
小春　わたしのは・・・病気じゃありませんから。
秀一　えっ？
小春　つわりです、多分。
秀一　えっ？　えっ？
小春　助産婦ですから。
秀一　ええっー、本当に？
小春　はい。助産婦ですから。
秀一　いやー、おめでとう！
小春　まあ、他人事みたいに。
秀一　でも、何と言ったらいいか。やっぱり、おめでとう！
小春　はい。

悲しげな音楽 11　父秀賢と母徳江が立っている

徳江　小春さん、秀一をなぜ止めでくれないの。
秀賢　ますますのめり込んで行くばっかりだ。

小春　秀一さんは優れた言語学者です。字の読めない人たちのために声を上げてくれているんです。

徳江　またそんなこと言って。

秀賢　どうしてもだめなら、あんたに出でってもらうしかない！

小春　・・・・・お腹に赤ちゃんがいます。

徳江　ええっ！

秀賢　だったらなおさらだ。生まれてくる子が「アカの子」って呼ばれたら可哀相だと思わないか！

徳江　秀一はあんたの言うことなら聞く。ねえ、頼むから。

小春　・・・・・できません。秀一さんのやろうとしていることを止めるような妻に、わたしはなりたくありません。

秀賢　檀家衆がなんといっているか、知っているか？

小春　・・・・・。

秀賢　泉流寺のせがれは、天皇陛下を敬（うやま）わないアカで、国賊だといっている。

音楽 11 終わる

小春　そんな中、昭和十一年に長女いずみが生まれました。しかし、私は実家に帰らざるを得ませんでした。秀一さんと私の結婚生活はたった二年で終わりました。

小春　昭和十三年春、山村さんから一通の電報が届きました。

秀一　やったあ、東北帝大の図書館で働ける。

美里　東北帝大の図書館で雇ってくれるという知らせでした。秀一さんは小躍りして喜びました。当時、東北帝国大学は「思想の問題は問わず」を貫き、文部省の要求を拒否して赤化学生を排除しませんでした。

大きな打撃音（銅鑼のような）

プロジェクターに文字『シンスケダダ　ナガラクビョウキノトコロ　キノウヨ　ルニ　ジニシボウ　スグカエレ　チチ　』

音楽12入る（読経、または打音）が流れる

警官　齋藤秀一。同行願おう。

秀賢　帰ってくれ。今、葬儀中だ。

警官　邪魔だ。公務執行妨害で逮捕されたいのか。

徳江　やめてください。帰ってください。秀一、秀一。

警官　かねてより、鋭意内偵中であった東北帝大庶務課齋藤秀一を中心とする国語国字ローマ

字運動については、各種出版物、国外国内同志との連絡通信等を仔細に検討したる結果、巧妙かつ合法的に偽装せる共産主義運動の一翼たる容疑濃厚となったため、昨日、検挙いたしました。

音楽12にノイジーな音がかぶる

ローマ字を国字にするなど 夢だよ

11

小春　取調室には天井から裸電球がぶら下がり、机が一つと椅子が二つおいてありました。座らされて待っていると真田警部補が入ってきました。

音楽12終了

真田　奥さんは逮捕じゃなくて、任意だ。わかる範囲で話してくれや。

小春　私は不思議で仕方ないんです。

真田　何が？

小春　この不況の中で誰もが苦しんでいます。その中で、農家の方々の多くは、文字が読めないために悲惨な目に遭わされてきました。夫はただ、そんな人たちの生活をよくするために文字の普及を目指してきただけじゃないですか。雑誌編集者としても言語学者とし

ても、ひたすら努力を重ねてきた夫を私は信じています。苦しい生活の中でも志を失わない夫は私の誇りです。そんな夫をなぜ、特高は捕まえなくちゃいけないんです？

真田　似たもの同士だよなあ。

小春　野に咲く花は、空を見ているのです。

真田　はあ？

暗転

真田　では、齋藤君、今回も取り調べでもはじめようかー。

小春　真田警部補は、秀一さんの目の前にある机に一冊のノートを置きました。

秀一　僕は何も悪いことはやってないです。

真田　運動の奴らはみんなそういう。ローマ字教えただろう。

秀一　文部省も難しい漢字を使わないようにという方針で(指導していたはずです)

真田　でも、横書きだよなあ。

秀一　えっ？もちろん横書きですよ、ローマ字は。

真田　日本語は縦書きなんだよ！横書きはローマ字に繋がり、ローマ字はエスペラント語に繋がり、最終的には世界単一言語の運動となる。

秀一　そんな馬鹿な話ありますか。明らかなこじつけじゃないですか。

真田　じゃ、作文だ。んー、題目は『民衆解放におけるインテリゲンチャの役割について』でどうだ？

秀一　インテリゲンチャなんて知りません。
真田　大学出てるくせに、インテリゲンチャも知らないか。
小春　真田警部補は秀一さんからノートを取り上げると机に座りさらさらと書いた。書き上げると得意げに秀一さんの前にノートを放り投げました。
真田　ほら。読んでみろ。
秀一　・・・・・。
真田　なら、俺が読んでやる。多くの知識階級は、その知識を大衆解放の方向へは使わず、もっぱら、自己のために用い、社会の変革には寄与していない。一部には大衆解放に尽力するものもいるが、文字に馴染みのない一般大衆は理解することができない。つまり、知識階級の働きは自己満足に過ぎず、客観的に見れば無駄な労力と言わざるを得ない。大衆のために、大衆が見向きもしない運動を積み重ねる無力さを、そろそろ知識階級は自覚すべきである。てな、わけでな。
秀一　・・・・。
真田　少なくても、おまえのやろうとしていることを俺たちは、つまり特高はだな、おまえらが解放しようとしている民衆よりも理解している。おまえらは、日本中にローマ字、あるいはエスペラント語を流通させ、日本語をなくし、天皇のお言葉である教育勅語を読めなくして、国体概念を消滅させんとしているんだよな？
秀一　違います。僕はそんなことをしたいとは、思っていない。エスペラント語があるから、日本語がいらないなんて、一言もいってない。方言だって標準語と両立しているし、日

本語と他の言語の両立を掲げているだけだ。ローマ字を覚えて日本語をなくそうなんて、みじんも思っていない。

真田　日本語が読めなくなったら、天皇陛下のお言葉である教育勅語も消えてしまう。それは、即ち日本の言霊の消滅だ。

秀一　言霊は、私たちの暮らす日常の言葉にこそ宿っていると、僕は・・・。

真田　(拍手する)我々の頭上に輝く緑の星は我々を高い目標に導く。暴力が支配せず、策略が威力を持たず、正義と友愛のみが栄える永遠の平和は、長く苦しんだ人類をいつか祝福するだろう。

秀一　!?　ザメンホフ・・・。

真田　エスペラント語を使ってるやつは、西瓜みたいなもんさ。

秀一　西瓜？

真田　外側は美しい緑に輝いているが、中身は真っ赤だ。理想主義を掲げているが、その中身はお国のことは考えない自己中心的な奴らだ。

秀一　何をいう。

真田　人道主義を唱えても、それは美しく装った表面上の理想論に過ぎない。「正義と友愛のみが栄える永遠の平和」？ そんなもんで、今日食べるものもなく、餓え死にしかけてる百姓が救えるか？共産主義者が目の前で死んでゆく赤ちゃんを助けてくれたか！共産主義者が身売りを止めてくれたかよ！

秀一　!!

小春　夫は、いきなり立ち上がって真田警部補の襟首をつかみました。しかし、そんなことには少しも動じない警部補は、苦も無く腕をひねると逆に秀一さんを机に組み伏せてこう言いました。

真田　日本エスペラント学会に入れ。

秀一　いやだ。学会は戦争に異を唱えない。人殺しは嫌だ。僕の考え方とは合わない。

真田　転向しろ。

秀一　断る。

真田　転べ。おまえら、アカに未来はないぞ。

間。

真田　転向しろよ、齋藤。転向すればすぐに帰してやる。嫁さんにも、娘にも会いたいだろう？

秀一　……。

真田　誓約書を書け。

秀一　断る。

真田　楽になれるぞ、みんなそうしてる。

秀一　!?

真田　齋藤、転べ。転向しろよ、齋藤秀一。

秀一　（首を振る）ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ。

真田　転向しろ、齋藤。

全員の朗読

ローマ字を 国字にするなど　夢だよと　警部補はいう 自信ありげに
支那にいる　ローマ字の友と　手を握り　君　抗日の火をかきたてよと

小春

一九三九年、昭和十四年、秀一さんは、鶴岡、山形、寒河江など県内の警察署の留置場を転々とした後、山形地方裁判所で実刑判決を受け、秋田刑務所に収監されました。肺結核に冒された秀一さんは、毎日薬を飲んでいました。書くことは禁じられ、ノートもペンもない監房の中でも秀一さんは、薬を包んでいた銀紙に針で密かにローマ字で思いを詩にして刻んでいたのです。

12　城跡の枯れ木の空の夕焼けを　鉄の窓から眺めやる

朗読

城跡の枯れ木の空の夕焼けを
鉄の窓から眺めやる
鉄窓に頬をくっつけて 外見れば
自由な蝶々　ひらひらひら
読み終えた本　また手にとって開いている
白い菊 冷たい空気の中に開いて

とらわれて　もはや一年
ラジオの琴に聞き入る　監房の日曜
汲み入れられるお汁
少しでも多かれと　見つめている

僅かばかりの陽だまりに
顔照らされる監房の中
夜になって　目をつむれば
はじめて自分だけの世界
思いのたけ　空想の翼広げる
たのしい世界

小春　一九四〇年、昭和十五年四月、秀一さんは獄中で結核の病状が悪化し、一年五カ月間、囚われていた留置場から、自宅療養の名目で釈放されました。

音楽13　入る。舞台奥の壁に赤字の落書き「Ne konvertita（ネ　コンベルティータ）」が出現する。

看守　なんだ、これは！

みんなが一斉にみる。真田が入ってきて落書きを見つめる。真田がふりむく。

真田　転向せずだ？　笑わせるぜ、齋藤秀一。

13　何より何より、あなたの面影は永久に忘れません

小春　庄内に戻った秀一さんは、結核をうつさぬように、実家近くの親戚の離れで暮らしていました。私は、時々、秀一さんを訪ねました。また、しばらくいけない時には、葉書を送っていましたが、秀一さんは体調が悪化しても繰り返し繰り返しその葉書を手に取って眺めていたようです。

音楽13 終了

小春　具合はいかがです？

秀一　来ない方がいい。ゴホ、ゴホ。病気が移るとたいへんだから。

小春　はい。

秀一　手話で頼む。

小春と秀一が手話を使う。

小春　お加減は？

秀一　ぼちぼちさ。すまんな難儀を頼んで。

小春　私は秀一さんからいわれた、ありのままに話しました。
秀一　親父やお袋はなんと。
小春　家に戻ることを、許してはもらえませんでした。すっかり、親の方では話ができているし、願いは、到底叶わないと思います。
秀一　やはり・・。親父は頑固だからな。俺には何もいわないな。
小春　身体を気遣ってだと思います。
秀一　ふん、世間様に気遣っているのさ。いずみの眼はどうだい？
小春　なかなか良くならないようです。
秀一　お袋たち、医者には見せてくれたのかな。
小春　まだみたいです。明日、医者に連れていってくださるようお願いしてみます。
秀一　すまんな、俺が不甲斐ないばかりに。
小春　まずは、身体を治すことが大事ですよ。
秀一　ああ。
小春　お盆にでも仕事が忙しくない時、どこかで待ち合わせして、三人で遊びにゆくことにしましょうか。
秀一　いいなあ。
小春　まずは、身体を治してくださいね。
秀一　わかった。
小春　そしたら、一緒にいけるでしょう。
秀一　うん。あれ、いい匂い。わかった、木蓮が咲いてるんだな。出会った時を思い出す。

小春　そうですね。
秀一　君と出会ったのも春だった。
小春　小春という名前ですから。
秀一　ははは。

音楽 14 入る

秀一　ありがとう。君のおかげで雑誌を作れた。
小春　それはあなたの力ですよ。
秀一　僕は何も出来なかった。
小春　あなたは何も出来なかったのじゃありません。しなかったのです。
秀一　えっ？
小春　あなたは、貧しい人たちから目をそらすことをしなかった。間違った社会から目をそらすことをしなかった。戦争から目をそらすことをしなかった。人から無駄だといわれても決して諦めることをしなかった。
秀一　諦めない？
小春　そうですよ。時代が別な方向に行っても、あなたは、諦めずに真っ直ぐ自分の道を歩いてきた。何より・・。
秀一　何より？
小春　何より、私は、そんなあなた様の面影を永久に忘れません。

秀一　・・・ありがとう。本当に・・ありがとう。

飛行機の音がする。小春・秀賢・菊世を除く全員が傘を持っている。
秀賢が花を抱えて立っている。菊世が声をかける。

菊世　和尚様？
秀賢　もっと大きな戦争が始まるらしい。
菊世　えっ？
秀賢　秀一が話していた。
菊世　ああれ、まあ。
全員が傘を開く。
小春　秀一さんは一九四〇年、昭和十五年九月五日、肺結核に腹膜炎を併発し、帰らぬ人となりました。享年三二歳。太平洋戦争開戦前夜のことです。その後、日本は泥沼のような戦争に突入していきました。
秀一さんは農村の暮らしがどんなに過酷なものかを身に染みて知っていました。だからこそ、言語学者として、生活と言語を結び付けて考えていたのです。地域文化を尊重し、方言や生活を大切にして、みんなが日ごろ話している言葉をみんなが文字として使えるようにすることで文盲をなくし、文字を使える者だけが富を得る仕組みを変え、みんなの暮らしや文化を向上させようとしていました。ローマ字運動や方言研究のめざす

方向は、いつも同じでした。文字をみんなのものにすることこそ、秀一さんが命をかけて望んだ願いだったのです。

音楽 14 高く。暗転

了

参考文献

「谷間に輝く星」 山形県国民教育研究所
「親の思い子の思い」 黒井 卓也
「齋藤 秀一日記」他 齋藤秀一を考える会